

トウリキ 東力 石川郡米丸郷に屬する部落。

トウリゴエ 刀利越 金澤上野町の盡端から、河北郡下田上・上田上・銚子口・下荒屋・朝屋・東市瀬・北袋・平下・町・古郷寺・石黒又・横谷を歴て、越中彌波郡刀利に至る間をいふ。この道程一五軒弱。

トウリサエモン 刀利左衛門 越中の一揆大将で、河北郡御神造山に居た。佐久間盛政湯浦口退治の時、左衛門は湯屋原村駒太郎と稱する賊將の援を得て能く戦うたが、盛政は刀利方にみた蝸島の半助・北袋の右衛門を誘うて遂に城を陥れた。この事、有澤永貞の古兵談殘叢集に見える。蝸島は田子島であらう。

ドウリンカマヤ 道林釜屋 能美郡濱(部落名)の内の小字。
ドウリンジ 道林寺 能美郡中(部落名)に在つて、眞宗東派に屬する。もと道場であつたが、明治十二年三月寺號の公稱を許された。

トウレイジ 東嶺寺 鹿島郡田鶴濱に在つて、曹洞宗に屬する。初め羽咋郡酒見龍護寺から分かれて、實相院と稱し、本七尾に在つたが、天正八年長連龍の田鶴濱に移つた後、寺をその地に移し、母の法號榮春院花溪妙香(一作花溪樹盛)によつて花溪寺と改め、後慶長三年長連頼は堂宇を改築し、翌年先考連龍の三十三回忌に際し、その法號東嶺良顯庵主に因みて龍翔山東嶺寺と稱した。寺藏の絹本着色十六羅漢像十六幅各一六六種・横四四纏は、室町初期の作と認められる。

ドウロウ 同牢 ↓ダイロウ 代牢。

トウロク 藤六 河北郡湯涌郷に屬する部落。

トウロクホウ 東六鳳 一冊。小松の俳人字中編。寶永戊子八月望柳後園吾仲序。京柏屋勸右衛門板。洛東双林寺阿彌亭で字中が月見の會を開き、支考がその句評を試みたもの、外、月の前・月の後の歌仙がある。又別に那谷の花を詠じた一卷があつて、それには字中が句解を試み、夕市が花見の記を作つてゐる。

トウロダケ 燈籠竹 初め藩士組外多羅尾八平の家に仕へ、本名不詳、燈籠竹はその異名である。燈籠竹博奕を爲して出奔、江戸井上河内守の押目付役から出身して知行五百石の家老となつたが、家を養子に譲り、京都に赴きて佐々木北翁と稱し、後九條家の雜掌となり名を左京高安と改め、宮様がねの貸付を周旋して明和元年金澤に來り、三年日向守に叙爵し、四年十一月廿二日歿。飛好院忠山北翁日勇と諡し、その子長氏の馬乗役田中源五左衛門によつて墓を靜明寺に建てられた。稗史道安夜話にはこれを燈籠竹丹藏として載せてゐる。

トガアリチカ 梶有隣 通稱貞五郎・源左衛門・八郎右衛門・八郎・八郎左衛門。延享四年養父織人の遺知五百石を受け、大小將・表小將に列したが、明和八年能登島に流され、後五ヶ山に移された。安永四年配所御免、先知五百石を賜ひ、御馬廻組に班し、天明五年正月十一日四十四歳を以て歿した。

トカイヒヨウテキ 渡海標的 一冊。天保七年石黒信由の著。航海業者の爲平易に天測の法を説き、算數の智識なき水手にも實行し

得べきを期したものである。
トガサキ とが崎 鹿島郡能登島なる田尻部落の西方に在る岬。

トガシ 富樫 ↓トガシ 富樫(石川)。
トガシ 富樫 石川郡の舊邑名。古刀銘畫に載せた刀劍の銘に、建武元年五月二日加州富借住人藤島光長とあり、大乘寺藏貞和二年四月十六日押野地頭藤原家善の寄進狀に、「押野庄田地四至限・東山王西江一限・南富樫界」とあり、又白山宮莊嚴講中記録貞治二年の條に、「勝重坊連海自富樫被登山之刻云々」とある。後世石川郡富樫庄内に富樫の邑名はないが、野々市が恐らくは古・富樫郷の本郷であつたので、富樫とも呼ばれたのであらう。論者或は應永・永享の文書に押野庄大乘寺となつて、その大乘寺は野々市に在るのだから、野々市は即ち押野庄でなければならぬといふものもある。しかし押野庄を王朝以降の富樫郷内の一部とすればこの問題は解決する。藩政時代では押野庄が小さくなつて、野々市は富樫庄内に屬して居た。

トガシ 富樫 幸若の謠物の中に富樫及び笈搜の二曲がある。富樫に在つては、辨慶が安宅に至つて勸進帳を讀むことを述べてゐるが、謠曲の如く義經はその場面に顯れぬ。故に幸若の富樫は、義經記の『平泉寺御見物の事』の條に當り、而して之に勸進帳の一段を加へたのは、恐らくは平家物語・源平盛衰記の文覺勸進帳から換骨したのだらうと思はれる。

トガシアキチカ 富樫詮親 元中八年(明德二)山名氏清と黨し、大内義弘と内野に戦うて歿したものに富樫介がある。この富樫介

は諸書にその名を記さぬが、たゞ唐朝紀傳にのみは富樫詮親としてゐる。若し眞にその人があつたとすれば、昌家の子であつたのであらう。

トガシイヘアキラ 富樫家明 泰明の子。通稱保次郎。正中三年守護富樫家明が、白山宮と金劔宮との和談に中介したことは、白山宮莊嚴講中記録に見える。家譜に信泰とあるものも、これと同人であらう。

トガシイヘクニ 富樫家國 吉宗の孫、宗助の子。通稱次郎、法名は佛西。兄貞宗の後を繼いで加賀介となり、富樫郷野市に住し、富樫介といはれた。

トガシイヘツネ 富樫家經 富樫家近の子で、次郎と號し、父に先だつて歿した。

トガシイヘナホ 富樫家直 次郎と稱した。家經の子であるが、父は早世したから、祖父家直の後を繼いだ。家直、安永二年國司の目代近藤師經に従うて、鶴川涌泉寺に濫妨し、その結果白山衆徒の強訴によつて師經等の配流を見るに至つたから、終身上洛することがなかつた。

トガシイヘナホ 富樫家尙 弘長元年眞言の僧澄海阿闍梨の爲に大乘寺を石川郡野市に建立し、尋いで正應二年徹通義介を屈請し、之を禪宗寺院たらしめたといふ。元徳元年歿。法名英俊。その名は大乗寺紀の外に見る所がないが、富樫氏の家系を見るに家春と泰明との間に過多の年序を距てるから、その空所を充たす人かと考へられる。